OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	其角と荷兮
Author(s)	辻村, 尚子
Citation	語文. 2004, 86, p. 30-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69073
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

其角と荷兮

辻村尚子

一、はじめに

『冬の日』・『春の日』・『あら野』という、いわゆる『俳諧七部集』のうち三作までもの編者とされながら、荷兮（慶安元～享保元年）に対する評価は決して高いとはいえない。

京俳人轍士の手になる俳諧評判記『花見車』（元禄十五年跋）に「身のねがひありてみやこにのぼり、太夫の位にならんとしたけれど、今はあとへもさきへもゆかず、松尾屋のむかしこそなつかしけれ」と、芭蕉に師事していた時が懐かしいと記され、また蕉門俳人の許六は、『俳諧問答』の「同門評判」（元禄十一年奥）に、「荷兮、分別しれず。愚にかへりたりといふべきか」と記し、さらに後には、蕉風に至るまでの俳諧史的変遷を綴った『歴代滑稽伝』（正徳五年跋）に、「路通・荷兮・野水・越人・木因等は勘当の門人也」と、蕉門を「勘当」された門人の一人としてその名をあげている。もちろん、荷兮が芭蕉から勘当されたという事実は確認されないのだが、その在世中から、蕉門を離れていった人物とみなされ、そのことによって「愚にかへりたり」といった評価が下されていたようである。

また、許六は『宇陀法師』（元禄十五年刊）に「師迁化の後に後集を出して下手の尾を出し、初心の人に嘲らるゝ。其人も力量有て、速に俳諧をやめるか、又は亡人の数に入侍るならば、一たび名を上たるは末代朽る事あるまじ。俳諧にかぎらず、其事に数寄出て後急度やめる事、力量なき人、ならぬ物也。只はやく死たしと願ふべき事也。長生の望あらば速に俳諧をやめ侍れかし」と、力量のない人は後集を出すくらいなら、死んだ方がましだとさえ述べる。この「後集」は荷兮が『あら野』の次に刊行した『曠野後集』（元禄六年十一月序）を指すと思われる（「師迁化の後に」とあるのは許六の記憶違いか）。問題は、この『曠野後集』にあった。許六の言葉は辛辣に過ぎる印象を受けるが、「ひたすら『あら野』『さるみの』二集に眼をさらし」て蕉風俳諧の真髄を学

び、芭蕉に「撰集を見る事、許子に及ぶ人あるまじ」と賞賛されたという（『俳諧問答』「俳諧自讃之論」）人の言であるから、聞くべきところもあると思われる。元禄七年正月二十九日付去来宛の芭蕉書簡は本書に対する芭蕉と去来の反応を最大限にうかがい得るものであろう。これも『曠野後集』について述べる際、必ず引かれるものであるが、今一度あげておく。

荷兮集之事日々に御申越。其仕かた賤敷凡情を顕し候事、御とがめ尤に被レ存候。され共平人の情、常之事に候へば、少も御とんぢやく被レ成間敷候。万世に俳風の一道を建立之時に、何ぞ小節胸中に可レ置哉。彼等に似合敷心指にて候。立廻るうちに古く成候て、既三つ物、五年七年此方一動の働も見えず候。(1)

『曠野後集』が刊行されるやいなや、去来から、矢継ぎ早に芭蕉のもとに批判が届けられたことがうかがえる。去来の批判は、荷兮がその巻頭に細川幽斎以下、守武、宗鑑を経て宗因に至るまでの古人の句を並べ、「たゞいにしへをこそこひしたはるれ」と序を結んだことにあった、とは諸説の説くところである。こうした古風回帰の姿勢がつねに新しみを追求した芭蕉の俳諧に背くものと受け取られたのであるという。この去来の批判に対して芭蕉は、「万世に俳風の一道を建立」しようとする我らにとって、そうしたささいな「平人の情」などとらわれる必要もないものだと応じる。ここには幾分、去来の憤懣を懐柔しようとする芭蕉の意図をも読み取るべきであろうが、芭蕉が荷兮らの歳旦三つ物に古びを見出していることには、注意すべきであろう。この点に関しては、安保博史氏「『曠野後集』―荷兮の俳諧道の岐路―」(2)に詳細な分析がなされており、『曠野後集』に復古趣味の嗜好ならびに貞門古風の句が見られることが指摘されている。荷兮は俳諧の出発点において長らく貞門の一雪、あるいは友次の門下とされ、また、延宝期には季吟門の蘭秀の傘下で活躍したとされてきたため、その俳風についても貞門的な点を指摘されることが多かった。近年になって、安保博史氏「尾張蕉門成立の俳壇史的意味について」(3)によってこれら貞門俳人との師匠関係は否定され、また同論ならびに森川昭氏「冬の日以前の山本荷兮」(4)によって、延宝後期には荷兮も談林俳人との交渉があったことが明らかにされたが、それでもなお、「荷兮＝貞門古風」という見方におおよそ変わりはない。

ところが、『曠野後集』成立とおなじ、元禄六年に刊行された『桃の実』には、荷兮の詠んだ凩の句が世間で評判になり、荷兮はその句によって「凩の荷兮」とまで呼ばれるようになった、という記事がある。古びを指摘されていた荷兮が、ここでは話題になっているのである。このことをどのように考えればよいのだろうか。いましばらく、この記事の周辺を辿ってみたい。

二、凩の句

『桃の実』は岡山藩士である編者几峰の、元禄五年三月の江戸勤番をきっかけとして編まれた集である。本集巻頭には芭蕉・其

角・嵐雪の発句が並び、つづけて、其角・兀峰の夏題十五の句合がおさめられ、また兀峰・嵐雪による両吟半歌仙なども見られ、この時兀峰は特に芭蕉・其角・嵐雪と交流を持ったことがうかがえる。その『桃の実』は、荷兮句の評判を次のように記している。

○尾陽の荷兮を此ごろ世に凩の荷兮といへるは、木がらしに二日の月の吹ちるか、といへる句よりいふ事なるべし。二日の月のぬしになりたる故にや。歌・連歌に物かはの蔵人、日比の正広、あくたれの兼与などいへるたぐひなるべし。

従来、この記事についての指摘はあったが、これが注目されることはほとんどなかった。あくまで「復古」「離反」の人として、荷兮は位置づけられてきたのである。しかし今、『桃の実』が芭蕉・其角・嵐雪らとの交流の成果による集である事に注意しておきたい。また、荷兮がその句によって「二日の月のぬし」になった、とあるが、この「ぬし」という言葉は、兀峰出府の直前、元禄五年二月に刊行された（『俳諧書籍目録』による）其角の『雑談集』に、「発句・付句ともに、句の主に成事得がたき也……」と始まる句主の論に見られるものである。これらのことを考慮すれば、兀峰のいう「此ごろ世に」というのは、元禄五年頃の江戸俳壇を言うのであろう。さらに言えば、なかでも特に其角の周辺ではなかったかと思われる。この荷兮の評判自体を引き起こしたのも、芭蕉ではなく、実は其角であると思われるふしがあるからである。

荷兮の「木がらしに二日の月の吹ちるか」は、月の二日目に出るか細い二日月の繊細なさまを、強く激しい凩に吹き散らされてしまうかのようだ、と言い取った句である。この句に関して、芭蕉と去来との間で次のようなやりとりがあったことが『去来抄』によって知られている。

凩に二日の月のふきちるか　荷兮
凩の地にもおとさぬしぐれ哉　去来

去来曰く「二日の月といひ、吹きちるかと働きたるあたり、予が句にはるか勝れりと覚ゆ」。先師曰く「兮が句は、二日の月といふ物にて作せり。その名目をのぞけば、させる事なし。汝が句は、何を以て作したるとも見えず、全体の好句なり。ただ「地まで」とかぎりたる「まで」の字いやし」とて、直し給へり。初めは「地までおとさぬ」なり。（先師評）

荷兮の句が自作より優れていると述べた去来に対して、芭蕉は、荷兮句は「二日の月」という特別な素材に頼っただけの句であるとし、そうした素材を用いていない去来句の方が「好句」であると述べ、さらに去来句に添削を施したという。芭蕉は、荷兮よりも去来の句を評価しているのである。

荷兮の句は『あら野』（元禄二年三月序）が初出であるが、このエピソードの直接の機縁となったのは、山本唯一氏が「尾張蕉門の芭蕉離反―荷兮の場合―」[5]で指摘するように、荷兮・去来の両句を収める其角の『いつを昔』であろう。『いつを昔』が刊行されたのは、元禄三年四月。この年の同じ月に『奥の細道』の旅を終えた芭蕉は幻住庵に入り、翌年九月に帰東の途につくまで上

方に滞在した。この間、『猿蓑』の編集をめぐって、芭蕉・去来・凡兆の間に度重なる交流が確認されている。去来は『いつを昔』の序文をも、ものしているから、右の『去来抄』のやりとりは、おそらく刊行されたばかりの『いつを昔』を前にして、元禄三年頃になされたものと考えられるわけである。しかも『いつを昔』において荷兮の句は、巻頭を飾る露沾の句に続いて、二句目に配されていた。おなじく凩を詠みながら、自分より重い扱いを受けている荷兮句を去来が意識しなかったはずはない。こうした経緯によって先のやりとりはなったものと思われる。山本氏の説くように、芭蕉の言葉には去来を励ます意図もあったことを考慮すべきであろうが、その点を差し引いたとしてもやはり、荷兮の句は芭蕉の意に十分かなうものではなかったのであろう。

山本氏はこのエピソードが、元禄五年に刊行された支考の『葛の松原』にも、去来から支考が聞いたという形で載せられていることに注目し、それによってこの一件を知った荷兮が、去来をより評価した芭蕉と、そのことを手柄のように吹聴してまわった去来に対して不満を抱くようになり、その反感のあらわれが、『曠野後集』における蕉風離反の態度であるとする。たしかに一理ある説だと思われるが、『曠野後集』刊行の元禄七年に名古屋を訪れた芭蕉に対する荷兮の歓待ぶり（元禄七年閏五月二十一日付杉風宛、曽良宛芭蕉書簡）を見る時、果たして荷兮にそうした反発心があったか、疑問が残る。ここでは、そのことよりもむしろ、其角の『いつを昔』において、荷兮句が、巻頭二句めを飾っていたことに注目したい。もちろんそこには、巻頭に「天象」の部を立てるという、構成上の意図もあったであろうが、それでも、磐城平藩主内藤風虎の息、露沾に次ぐ二句目というのは、重い扱いである。

現在確認される其角と荷兮との関係で最もはやいものは、貞享四年、其角の編集した『続虚栗』に荷兮の発句が一句入集していることであるが、両者が初めて直接に交流を持ったのは、貞享五年（九月三十日元禄に改元）の其角の上京の旅においてであった。この旅の成果を収録するのが『いつを昔』であるから、今、その問題を考える上で、この上京の旅は注目すべきである。

森川昭氏紹介の「貞享五年（元禄元年）知足日記」[6]の九月十七日の項に、「天晴　江戸其角御こし。晩ニ荷兮方へ被参候」とあり、この時、其角は尾張の荷兮のもとにも立ち寄っていることがわかる。貞享五年九月三日付荷兮（推定）宛芭蕉書簡に「其角も上り度よし申候。自然立寄候はゞ、よろしく御取持可レ被レ下候」とあることから、この時の両者の会合をとりもったのは芭蕉であったと推定されている。また、『あら野』に収められる、

荷兮が室に旅ねする夜、草臥なをせとて、箔つけたる土器出されければ

かはらけの手ぎは見せばや菊の花　其角

（巻之四　暮秋）

の其角発句ならびに、

狩野桶といふ物、其角のはなむけにおくるとて

狩野桶に鹿をなづけよ秋の山　荷兮　（巻之七　旅）

という荷兮の餞別句によって両者の交流をうかがうことができる。ちなみに、この後、其角は京に入り、去来・凡兆と嵯峨で遊吟しており、その発句が『いつを昔』におさめられている。去来の凩の句も、『いつを昔』に「十月廿日嵯峨遊吟」として、「臨川寺凩の地迄落さぬしぐれかな」と載り、この時に成った句なのであった。さて、江戸への帰途、其角は再び尾張に立ち寄っていることが、「元禄元年知足日記」に、「十二月四日　晴天　夜ニ入帰宅申候。其角江戸へ下り」とあることからわかる。『あら野』に、「其角にわかるゝとき／あゝたつたひとりたつたる冬の宿　荷兮」（巻之七　旅）とあるのは、この時もまた両者の交流があったことを示している。『いつを昔』における、其角の荷兮に対する厚遇は、こうした直接交流によるところが大きかったと思われる。そして、この其角のはからいがあってこそ、荷兮の凩の句は注目を集め、荷兮は「二日の月のぬし」になり得たのであろう。

芭蕉は、元禄三年頃、上方で去来に対して、『いつを昔』を前に、荷兮句を批判していた。一方の江戸では、同じ『いつを昔』をきっかけとして、荷兮句が其角周辺で評判になり、それは『桃の実』によれば、几峰が江戸に滞在した元禄五年の春頃においてもなお話題であった。芭蕉が江戸に帰着したのは元禄四年十月末であるから、芭蕉が江戸にたどり着いた時、そこでは批判したはずの荷兮句が評判になっていた、ということになる。とすれば、問題はたんに荷兮という一俳人の評価のみにとどまらない。この時期の芭蕉不在の江戸俳壇と、芭蕉との距離を考えるうえでも重要な問題を呈しているといえよう。

三、『雑談集』の荷兮評

其角の荷兮に対する処遇は、たんに、両者の直接交渉によるものであったのだろうか。ここで、元禄五年に刊行された其角の『雑談集』に見える次の一節に注目したい。

うぐひすや竹の枯葉をふみ落し　荷兮

一、竹に鶯を取合せてと案たらば、古歌・連歌まぎらはしく成て、発句には云とられまじくや。まだ初春の藪のそよぎを、鶯かとも気を付たる所、わづかに作意有。それも又気色をさがし出て、爰に是を求めて新しなどゝおもはゞ、己レ合点したりと、人の聞しるまじき句成べし。「定家卿の歌は聞得る事稀也」など申すは、恐れ多し。

竹に鶯を取合せて句作しようとすると、古歌や連歌のようになってしまい、なかなか発句に詠むことが難しいところを、荷兮の句はうまく詠み得ている、と其角はここで荷兮句を称している。例えば「竹ちかくよどこねはせじ鶯のなく声きけばあさいせられず」（『後撰和歌集』）、「今よりはやどのまがきに竹うゑてなく鶯のねぐらさだめん」（『拾玉集』）のように、和歌では竹は鶯のねぐらとして詠まれることが多い。また、連歌においても、「鶯トアラバ…竹」（『連珠合璧集』）とあるように鶯と竹は寄合語であり、『発句帳』（寛文六年刊）には「雪もおしうぐひす来なく園

の竹　宗養」、「うぐひすもよごもる竹の初音かな　紹巴」といった連歌発句がみえる。この流れをうけて貞門俳諧においても、「をのづから鶯篭や園の竹　望一」（『犬子集』）、「うば竹は老の鶯のねぐらかな」（徳元『塵塚誹諧集』）、「竹にぬる鶯の歌やつつどまり　重俊」（『続山井』）とこれを素材にして、見立てや縁語、掛詞といった機知をこらした句を見出すことができる。一方、荷兮の句は、鶯の鳴く声ではなく、まだ初春の頃のわずかな藪のそよめきによって鶯の存在に気づく、という微妙な所を詠みとっている点にようやく趣向が見いだせる句であると其角はいう。これは、「鶯：ねぐらの竹」という固定した取合せに頼ったり、新しい句作をしようとわざとらしく初春の景を探し求めて詠んだ、作意があらわな句とは一線を画するものであるというのだ。この一節の直前には、先にも触れた句主の論が展開されているのだが、そこで其角は、「手がはり成句作にて主に成んと工」むと、「をのづから興さめ」してしまうのに対し、「ありてい成句にて秀逸なるは妙を得し上手也」と述べる。荷兮の句も、ただありのままを詠んでいて、それでいて絶妙な、優れた句であるということであろう。

この句は、のちに『俳風弓』（壺中編、元禄六年刊）のほか、『曠野後集』にも収められている。とかく貞門古風の作が見られることが強調される『曠野後集』であり、またそうした句が多いことも事実であるが、この「鶯や」の句は、先に挙げた貞門の句とは明らかに違う句作りである。『雑談集』のこの一節は、『曠野後集』の作風を見直す上でも示唆的であるといえよう。

さて、この其角の荷兮評であるが、これも、たんに其角と荷兮の交流によるもの、と片づけてしまうことはできないように思われる。『雑談集』には、次のような一節も見られるからである。

：付句は、殊更時の宜しきをうかゞひぬべし。翁、尾張にて、

宮守が油さげ行小夜更て

と云句を付合せられければ、熱田の宮のいまだ造営（ザウエイ）なかりし年にて、人々の心も神さびたる折ふしにかなひて、皆誹諧の眼（マナコ）を付かへしは、『冬の日』といふ五歌仙にて、ひざらき侍り。

芭蕉の「宮守が」という付句は、実際には『冬の日』に収められているのではなく、『冬の日』が成立したのと同じ、野ざらし紀行の旅中に興行された、「つくづくと」歌仙（『熱田三歌仙』）中の一句なのであるが、其角はここではっきりと、『冬の日』が蕉風開眼の作品であったと述べている。『冬の日』をこのように位置づけたのは、おそらく、其角が最初ではないかと思われる。

『雑談集』が成立した時、のちに「俳諧の古今集」（『宇陀法師』）とも称された『猿蓑』はすでに刊行されている。『雑談集』の跋には、「元禄辛未歳内立春日於狂而堂燈下書／芭蕉翁回国帰庵時宜相応故被校合畢」とあり、これによればその成立は、元禄四年十二月十九日、ちょうど十月末に江戸に戻った芭蕉を迎えてのことであった。また、元禄四年九月二十三日付槐市・式之宛芭蕉書簡に「頃日、其角又集仕由申越候間、撰入可レ仕候」、同年十

一月十三日付同両氏宛芭蕉書簡に「春は其角集あみ申候間、入集可レ仕候」という、其角の編む「集」が、推定されているように、其角の『雑談集』を指すならば、『雑談集』の編集は、元禄四年の冬までなされていたことになる。一方、『猿蓑』の刊行は、元禄四年七月のことであった。その『猿蓑』に荷兮は発句二句が入集するのみである。『去来抄』には、荷兮の「面梶よ明石のとまり時鳥」句が、『猿蓑』撰入にもれたことが記されており(1)、他にもこうした例があったことを想像させる。去来二十六、凡兆四十二句の入集は編者として当然ではあるが、『ひさご』(元禄三年八月刊)に関与した乙州の八句、珍碩七句、正秀六句、越人六句、曲水三句に比べれば、荷兮の二句は明らかに少ない。『猿蓑』において、芭蕉の関心が上方連衆にあったことは明らかである。

『猿蓑』の序文は、他ならぬ、其角が記している。とすれば、その序に「我翁行脚のころ、伊賀越しける山中にて、猿に小簑を着せて、誹諧の神を入たま」ったという『猿蓑』における、最新の芭蕉の俳諧について、『雑談集』において論を展開することもできたはずである。そうした時に其角はなぜあえて荷兮の句を、そして荷兮の編んだ『冬の日』を評価したのであろうか。

四、其角の視点

其角が荷兮の「鶯や」句を評価したのは、「まだ初春の藪のそよぎを、鶯かとも気を付たる」心を、句作を巧まずに詠んだ点であった。また、『冬の日』を蕉風開眼の作としたのは、芭蕉の「時の宜しきをうかゞひ」得た付句が、人々の心の「折ふしにかなう」ったからであった。この巧まぬ「心(=情・誠)」と、「時宜」の重要性は、『雑談集』においてくり返し説かれている。

一、誹諧に新古のさかい分がたし。いはゞ情(ジャウ)のうすき句は、をのづから見あきもし、聞ふるさるゝにや。又、情の厚(アツ)き句は、詞も心も古けれども、作者の誠より思ひ合ぬるゆへ、時に新しく、不易(フエキ)の功あらはれ侍る。高位の人の取あへず思ひ出給へる句、少年・少女・遊女・禅門などの、折にふれたる事云出しは、心と心のむかひあへる故、等類ある句も聞ゆるされ侍り。

「情の厚き」句は、「詞も心(ここの「心」は伝統的「本意」の意と思われる)」も古びているが、「作者の誠」があるために千歳不易の功があらわれる。「取あへず思ひ出」た句や、「折にふれたる事云出し」句が、等類があったとしても許されるのは、それらが物事の伝統的本意と「作者の誠」が対等に向き合っているからだという。そこに、趣向を凝らそうと巧む心があってはいけないのである。其角はまた、別の箇所で、次のように述べる。

:打越の六かしき所か、席のしぶりたる時に、時に宜しく付流したらば、たとへ無点の句也とも、是用也。点者の心をかねて、句ごとにあらぬ工みをめぐらし、人の前句をばひあひなどせんは、無下に口惜きはたらき也。用・無用の境(サカイ)、新古の分別、心ざしを高く守らば、自然の風流あらはれて、幽玄の一句も、いかで思はづしぬべきや。

これは連句についての論であるが、ここでも其角は作意を巧まぬ心によって、時宜よく句作することの重要性を述べ、新風・古風といった問題は付随的なものであると述べる。あくまで大切なのは、こうした「心ざし」を高く守」ることであり、そうすれば、自然と不易の句もなしうるものだと説いている。荷兮の「鶯や」の句、ならびに『冬の日』は、その「心ざし」のある例としてとりあげられたのである。

ところで、そのように説く、其角じしんはどうであったのか。『雑談集』には、次のような一節も見られる。

一、去頃、「品かはる恋」といふ句に、

百夜が中に雪の少将

と云句を付て、「忍の字の心をふかく取たるよ」と自讃申けるに、『猿蓑』の歌仙に、「品かはりたる恋をして」といふ句に、

うき世のはては皆小町也

と、翁の句の聞えければ、此句の鈷やう、作の外をはなれて、日々の変にかけ、時の間の人情にうつりて、しかも翁の衰病につかはれし境界にかなへる所、誠をろそかならず。少将と云る句は、予が血気に合ぬれば、句のふりもさかしく聞え侍るにや。此口癖、いかに愈しぬべき。

『猿蓑』の歌仙に収められる芭蕉の付句には芭蕉の「誠」にかなった「鈷」があらわれているのに対し、みずからの句は、おのれの「血気」に相当して「さかしく聞え」る点を自省したと記している。この芭蕉と其角の相違については、石川八朗氏「其角の芭蕉観から」[8]ならびに、白石悌三氏「誠と作意」[9]に詳しいのでここではこれ以上触れない。ただ、『猿蓑』成立の元禄三、四年頃に其角は芭蕉との相違を自覚するようになったという石川氏の指摘には注意しておきたい。元禄三年九月二十六日付曽良宛芭蕉書簡には、芭蕉が湖南連衆と巻いた『ひさご』のかるみにとまどう江戸蕉門の反応が記されるが、そこに、「キ角などは心に入不」申候様に承候」とあるのは、その徴候と見ることができよう。

貞享元年の「野ざらし紀行」の旅以来、江戸を離れ、日々新しみを求めてゆく芭蕉との距離を最も敏感に察知したのは、延宝のはじめから芭蕉と歩みを共にしてきた其角ではなかったか、と思われる。また、そうした其角であったからこそ、芭蕉の新風に取り残された者たちを慮ることが可能だったのではないか。塩崎俊彦氏「其角『雑談集』と芭蕉」[10]は、『雑談集』の内容に、芭蕉の江戸不在が色濃く影響していることを指摘し、「『猿蓑』を世に送り出した元禄四年というこの年は、其角にとって、守るべき芭蕉とその一門の風雅というものの内実が、ようやく具体的な形をとり始めた時期」であると結論づけるが、そこには、広まりゆく蕉門間の微妙な均衡を保つ、其角なりの心遣いもあったのではないかと思われる。『雑談集』における荷兮の評は、そうした、其角独自の視点と配慮によってなされたものであった。

五、『雑談集』と『曠野後集』

『雑談集』の翌年に刊行された『曠野後集』に、其角は発句八句が入集する。八句というこの句数は、芭蕉の四句よりも、そして去来の一句、凡兆の二句入集よりもはるかに多い句数である。『雑談集』を目にしたであろう荷兮が、『猿蓑』を編んだ去来・凡兆よりも、以前から交流もあり、また何よりも自身の力量を認めてくれた其角に心を寄せるようになるのは自然な成り行きではないだろうか。こうした荷兮の心情の一端を、其角に対する厚遇に見ることが可能であろう。

さて、その『曠野後集』の巻頭に並べられた細川幽斎以下、守武、宗鑑を経て宗因に至るまでの古人の句、ならびに「たゞいにしへをこそひしたはるれ」と結ばれる序文が去来の非難の的になり、その批判に応じた芭蕉も荷兮の俳諧に古びを指摘したことはすでに述べた。たしかに、『曠野後集』を『猿蓑』と比べれば、こうした趣向が時代錯誤と受け取られることは否めない。しかし、これを『雑談集』と並べてみる時、そこにはそれほどまでの違和感は生まれないのではないか。

『曠野後集』に挙げられる古人十二名のうち、守武・宗鑑・親重（立圃）・維舟（重頼）・貞室・忠知・宗因の七名の名が『雑談集』にも見られるのである。また、これまでその末尾に注目が置かれることの多かった荷兮の序文だが、冒頭には「今はむかし、是等の人〳〵の句を思ひはかるに、唯みること聞ことにいちじるく、詞はいひ出るまゝをはじめの姿になして、あやどるさま見えず。をのづから景と情とそなはりて、又外に優を得たり。中にも玄旨老師「よしやふれ」との玉ひしは、凡の狂句げにもあらず。はなを待る心ふかく、ことばは世話の上に尽て、余情限あらじかし：」と、巻頭に掲げた古人の句が、詞や趣向を巧まず、作者の「心」を詠んでいるために、自然と景情備わった優れた句になっていると述べている。これは、其角が『雑談集』において説いていたことに重なる。荷兮は続けて、これら古人の句に対して、「やゝこの比にいたりて、ちり〴〵草の雫をだに味ふる人なきにや。一ふしあるもじも聞ずなりゆくぞつたなし」と当流を批判する。従来、この「この比」以下の文は『猿蓑』の新風俳諧に対する批判と解され、ここに荷兮の蕉風離反の態度が見られるとされてきたが、しかし、これらもむしろ、其角の『雑談集』の説くところに倣ったのではないだろうか。

一、今や誹諧の正・風おこなはれて、心の上に功をかさね、何事も一句に云とらずと云事なし。然れども、是をこれぞと、手に取て覚へたる人はなくて、只句作をあやかり、行形（イキヤウ）をまね、それかこれかと紛らはしきばかり成、聞とり法問也。それいかにと云に、古風のまったゞ中に生れて、今は六十にもあまりし人の、「昔風は申けれども、今風はゑ申されず」と、卑下せらるゝにて知べし。其昔風といへる時の、正章・重頼・立圃・宗因、一句とてもあだなる句はなし。時代蒔絵（マキエ）の堅地にて、尤秘蔵せらる。又、昔とて

下地麁相に、念の入ざるは兀やすく破やすし。今何の用にたゝず。当時の作者、此心を得て、随分念を入て工案せよ。千歳の後も至宝也。……

古風といわれる貞室・重頼・立圃・宗因の句には、一句としていい加減な句はなく、千年の後でも通じる秘蔵の「至宝」であるという。それに対して、「誹諧の正風」が行われ、今やどのような事柄でも一句に表現できるようになった当流俳諧には、しかしながら、いわゆる句主になるような人物はおらず、独自性のないよく似た句作ばかりであると其角は指摘する。荷兮の当流批判はこの其角の論調に近似するのである。そこに芭蕉離反の意志まで読み取ることはできないであろう。『雑談集』の其角の跋に「芭蕉翁回国帰庵時宜相応故被校合畢」と付されていたことにも注意しておきたい。『雑談集』が芭蕉の校合を経た、という一文がどのような意図によるものか、今は明確な考えを持ち合わせていないが、この一文は、ここに大きな意味を持つことになる。荷兮としては、自身の力量が認められた、しかも芭蕉のお墨付きの、『雑談集』に従ったまでであったのではなかろうか。

確かにその序文を、「たゞいにしへをこそひしたはるれ」と盲信的な古人思慕の意で結んでしまったところに、荷兮の限界があったことは認めなくてはなるまい。そうした荷兮であることを知らぬ其角ではなかった。『雑談集』のなかに、何気なくおかれる次の一節の真意に荷兮は気づくべきであったのかもしれない。

一、荷兮集『あら野』に「辞世」とあり。

散花を南無阿弥陀仏と夕べ哉　守武

彼集のあやまりか。神職の辞世として、何ぞ此境をにらむべきや。只嗚呼と歎美してうちおどろきたる落花か。

守武の句は、『あら野』には「辞世」ではなく「末期に」と前書があるのだが、いずれにせよ、『あら野』に守武の辞世の句として掲げる発句について、其角は、伊勢神宮の神官である守武が「南無阿弥陀仏」の境地を悟るはずはないと『あら野』の誤りを指摘する。守武という古人の立場にたって、あくまでも其角が見ようとしていたのは、その「作者の誠」なのであった。また、ここに、自らの視点に基づいて、誤りは誤りとして指摘し、評価すべき点は評価する其角の姿勢、あるいは器量といってもよいのかもしれない、を見ることができよう。

六、『曠野後集』その後

『曠野後集』刊行間もない元禄七年五月、名古屋に立ち寄った芭蕉は、「荷兮へ寄り候ひて三夜二日逗留、荷兮よろこび、野水・越人同前にてかたりつづけ申し候」（元禄七年閏五月二十一日付曽良宛芭蕉書簡）という歓迎を受けた。もっとも、この時芭蕉は、「名ごや古老のもの共は少し俳諧も仕さげたる様に相見え候」（同書簡）と感じたようだが、荷兮らの態度は好意的であり、そこに反芭蕉的なものを見ることはできない。また、其角は同じ元禄七年に刊行した『句兄弟』第二十七番越人句の注解に、「尋常の詞によりて中七字に風俗を立たるは荷兮越人等が好む所の手

癖也」と荷兮らの手法を指摘するが、ここに古風といった言葉や、あるいは去来のような批判めいた口調は見られない。芭蕉とも、去来とも異なるものを其角は荷兮に見ていたのである。

元禄七年十月十二日、芭蕉はその生涯を閉じた。その臨終や葬送の様子、ならびに門人による追善の俳筵については、其角の『枯尾花』に詳しい。それによれば、元禄七年十一月十二日に丸山量阿弥亭で芭蕉初月忌の百韻興行が興行されている。発句、第二、第三は、嵐雪、桃隣、岩翁で四句めに其角の名が見える。興味深いのは、そこに荷兮と去来も出座していることだ。百韻中に荷兮に去来が付けた句が二句見え、また名残の裏では「新大橋の富士もよく成」という去来句に、「なつかしや切干下す尾張宿」と荷兮が付けている。去来はこの年の初め、荷兮の『曠野後集』を批判する書簡を芭蕉に送っていた。この両者の間にはどのような空気が流れていたのであろうか。のちに、去来はこの時のことを、『俳諧問答』「答許子問難弁」（元禄十年成）のなかで、「翁迂化の時、東武の其角・嵐雪・桃隣等、於東山て追悼の会をなす。かれ（辻村注・荷兮）蕉翁の門人の数に加りて着坐す。今書を作りて翁をあざける。尤憎べきの甚敷もの也。かれが心操をかへり見るに、翁います時は、先師をうりて己が浮世の便とし、先師没し給ひては、又先師をうりて、初心の輩を、今は先師にまされりとあざむき道びかんが為なるべし。其難ずる処、誠に笑べきのみ。我是がために、その辟耳を切て、邪口をさかんと欲す」と、芭蕉の名を自らの俳諧活動の宣伝にしようとするはからいだと痛烈に非難している。この非難は、直接には元禄十年に刊行された荷兮の『橋守』がきっかけとなったのだが、「又頃日、尾陽の荷兮一書を作る。書中処々先師の句をあざけると聞けり。我いまだ此書を見ず」と述べるように、去来自身まだこの書を見ていないのであったし、また『橋守』が去来のいうような芭蕉批判を目的とした書ではないことは、阿部倬也氏「俳書「橋守」小考」に指摘がある。[11] 去来にとって荷兮は非常に目に付く存在であったようだ。そしてその去来を「先生」と呼んだ許六によって荷兮が「勘当の門人」として記し置かれることになったことは冒頭に見てきた通りである。

芭蕉の旅によって蕉門は各地に広まりを見せた。その門人間には敵対心も含めて、さまざまな思惑があったことであろう。そうした状況のなかで、其角の動向には注意すべきものがある。右の一座が可能であったのも、そこに其角の存在があったからではなかろうか。その其角の著した『雑談集』を通してうかがえる、当時の蕉門俳人の諸相、またその刊行の意味については、改めて考える必要があると思われる。今後の課題としたい。

注

（1）芭蕉書簡の引用は、今栄蔵氏『芭蕉書簡大成』（平成十七年、角川書店）により、年時推定なども同書によった（以下同）。

（2）「中央大学国文」第二十九号、昭和六十一年三月。

（3）「連歌俳諧研究」第六十四号、昭和五十八年一月。

（4）『江戸文学』第一巻第三号、平成二年六月。

（5）「大谷学報」第三十七巻第四号、昭和三十三年三月。
（6）「俳文芸」第四十四号、平成六年十二月。
（7）『去来抄』では、「面梶よ」句の作者を野水とするが、この句は、諸注指摘するように、『曠野後集』に入集する荷兮の句である。
（8）「連歌俳諧研究」第三十号、昭和四十一年三月。
（9）初出『文学』昭和四十四年九月号。『江戸俳諧史論考』平成十三年、九州大学出版会に再録。
（10）「山手国文論攷」第十五号、平成六年三月。
（11）「愛知大学国文学」第六号、昭和四十年二月。

＊本稿で使用した主な本文の引用は次のテキストによった。影印を使用したものは、読解の便宜をはかり、私に濁点、句読点を施す等の処置をした。

『雑談集』：『勉誠社文庫19　雑談集』（昭和五十二年、勉誠社）
『あら野』・『曠野後集』・『いつを昔』：『古典俳文学全集6　蕉門俳諧集一』（昭和四十七年、集英社）
『桃の実』：『蕉門俳書集　四』（昭和五十八年、勉誠社）
『去来抄』：『新編日本古典文学全集88　連歌論集　能楽論集　俳論集』（平成十三年、小学館）
『俳諧問答』・『歴代滑稽伝』・『宇陀法師』：『古典俳文学大系10　蕉門俳論俳文集』（昭和四十五年、集英社）
『花見車』：『新日本古典文学大系71　元禄俳諧集』（平成六年、岩波書店）